

歴史は、民族の魂が創造する

目次

- (一) 歴史から人類共生の道を学ぶ
- (二) 無知に因る「欧米モノサシ」史観を修正する
- (三) 帝国主義をいかに乗り踰えるか
- (四) マッカーサー改革への被害者意識から脱け出る
〈資料〉 神道指令（抜粋）
- (五) 過去に心を奪われず、未来への建設に取り組む
- (六) 明治維新の意義——真の魂を結集して歴史を創造——
〈資料〉 教育ニ関スル勅語
〈資料〉 軍人ニ賜ハリタル勅諭（要点のみ）
- (七) 歴史の創造には未知領域への決断が求められる
〈資料〉 日米戦争における宣戦の詔書
〈資料〉 大東亜（日米）戦争における終戦の詔書
〈資料〉 昭和天皇とマ元帥会見記録（要旨）

永安 幸正

キーワード：歴史、マッカーサー改革、明治維新、人類の共生

(一) 歴史から人類共生の道を学ぶ

船旅をすると、嵐にも出合うし、日和にも出合う。船酔いにも苦しむ。しばしば集団が共同幻想という船酔いにかかることもある。人類の心は、空想とか創作を容れる可能性を秘めるからであろうか。歴史の船酔いになると、頭の中の羅針盤が狂うことになってしまう。

そこに、国際論争というものが起こる。それは、あたかも船と船のぶつかり合いであり、しかも船酔いした者同士の口論のように、ロレッツが回らなくなる。特に国家の歴史、民族の歴史という領域には、教育がかかわってくるが、どんな歴史を子供に教育するかとも関連して、国際的な論争の種にもなる。日韓、日中の歴史・教育論争がその良い例であり、日本と東南アジア、日露間にも、論争がある。

うがった見方をすれば、アメリカとEUは、中国で発展する巨大市場へと進出したい。だから、日本が中国とギクシヤクして日本資本の進出に少タブレーキがかけられることを、密かに望んでいるのではないか、という評論さえある。

欧米にとつては、東アジアの主役は、日本から中国に交替してもかまわないし、やがて巨大人口を有する中国が日本を追い抜くに違いない。国際社会には、こういう先走った説もあるということを、われわれは見

逃してならないだろう。実際、ベンツなど欧州車は日本車よりも早くから、大量に中国市場に進出している。グローバル化とは市場争い——売り買い競争——の時代になるということなのだ。

かつて、一九四一―四五年にかけて行われた日米戦争の真の原因は、アメリカの門戸開放政策（open door policy）を——米国から言わせれば——日本が邪魔したことに求められる。むろん、日本だけが悪者だったということではない。双方は、自国利益を貫く立場から、衝突せざるを得なかったわけである。その日米間の争いの被害者・死傷者は、戦場とされた東アジア大陸——そして東南アジア——の住人であった。

大きな潮流として眺めれば、これからの二十一世紀には、アメリカ及びEUのアジア進出という大志（アンビション）と、中国が日本を超えてアジアの盟主になりたいという大志とが、出合って手を結ぶのではないか。

日本の「大東亜共栄圏」は、一九四〇年代初め数年だけの期間に、しかも戦争という方法を通じて、急いで築こうとした構想であったが、二十一世紀、今度は主役を入れ替え、中国を中心としたものとして、再び歴史に登場するのではないか。その名も「大中華共栄圏」あるいは「大東亜共同体」として。（台頭しつつある中国については、大前研一『チャイナ・インパクト』講談社、参照。これは、中国とひと口にいうが、東北（旧満州）、北京、天津、上海、広州、その他内陸各地を八つの地域くらいに分けて、それぞれが経済圏であり、日本はその各々と付き合うべし、と助言する。）

東アジアだけではない。アラブやインドを含む西アジアや南アジアも風雲急である。インド亜大陸において、軋轢が続く。インドとパキスタンは極めて根の深い対立と批難のぶつけ合いの最中にある。インドとスリランカの間の海峡も波高し。人々はある意味でイスラエルとパレスチナの関係にも等しい程度に対立し合っている。

インド亜大陸一帯は、ガンジス河の下流域である東のベンガラデシユを含め、西のインダス河流域まで、古来ヒンドウスタンと呼ばれ、ある時期からムガル帝国という穏健なイスラム教の王（二六〇五年に没したアクバル王）が大半を支配するところであった。

そこへ、日本でいうと、江戸幕府の始まりの頃であったが、東インド会社を通じて、大英帝国による植民地統治が進む。一八四五―四九年のシク戦争をもってインド全体の征服が完了し、一八七七年英国王を戴くインド帝国が成立する。

このように、欧米の帝国支配は十分長い時間を掛けて行われた。

このインド地域は、イギリスの長い支配の後、第二次世界大戦後、一九四七年に独立を果たす。だが、独立に当たり、イスラム教徒の多い現パキスタン地域と現ベンガラデシユ地域が一緒にパキスタンとしてインドから分離した。

結果、今日のようなインド連邦とパキスタン国となり、その後一九七一年にはパキスタンの東部からバン

グラデシユが分離独立した。インドとパキスタンとの分離を、「パーティション」(Partition) と無念の感情をもって呼ぶ人たちが、この地域にはいる。

非暴力主義者マハトマ・ガンディー（一八六九―一九四八）は、インド独立の父として崇拜される。当時この分離には反対であったのだが、一九四八年ヒンドゥー原理主義者の青年が放った凶弾に倒れた。やはり信仰の違いというものがあつたことが、インドとパキスタンが一つの国家として纏まって行くことを不可能にしたのだろうか。

インドは人口規模からすれば、大多数がヒンドゥー教徒である。とはいえ、インド内部には現在なお、世界最大数のイスラム信徒が住み、アラブを抜いて世界最大のイスラム人口の国である――なお、ターバンといえはインドの風俗のように思われているが、本来あれはグル・ナーナク（一四六九―一五三八）が創始したシク教の人々のスタイルである。

しかも、インドは、パキスタンとの間に長い間、北方のカシユミール地域の帰属問題を抱える。インドには大小のテロが絶えず、カントリー・リスクが大きく、外国からの投資も中国ほどには増えない。

両国が、また両国のヒンドゥーとイスラムの信徒が、どうか仲良くすることを祈りたい。さもなくば、南アジア、インド亜大陸は、「貧困と苦しみの大地」たることに別れを告げられないであろう。

さらに西方に行くと、中東におけるパレスチナでのアラブ系住民とユダヤ系住民との争いが、おそらくこ

の先ずつと続きそうであるが、その真因しんいんは主にユダヤ教・キリスト教とイスラム教の間の、宗教という形をとった集団意識が引き起こす三つ巴さんぞうの憎悪ぞうおにある。中東と南アジアは、宗教が絡んだ「難問の大地」である。

歴史論を起こすときの課題の一つは、こうした国家という人間集団の間の争いをいかに回避するか、いかに乗り越えるか、という点にある。

争いには、しばしば心実こころまじとしての共同幻想きょうどうげんそうとなったナシヨナリズムが纏わりついてくるだけに、しかも宗教同士の争いとも重なって、根深く、解決することは容易でない。それでも、われわれは、解決への努力を決して諦めてはいけない。

国家という人間の団体は、一つの宿命を背負わされているのであろうか。われわれは、これまで昔から隣地に住んできている人を取り替えることもできないし、自分も住んでいる場所を今の所から他所たじよへと引越すこともできない。

だから、隣同士となりどうし、どうにか折り合いをつけるように、自分の心を変え、付き合い方を改善する外はない。他人（の考え）を変えるための最良の方法は、まず自分（の考え）を変えることにあるともいわれるが、隣人（敵ではない）を知る。己を知る。変を知る。そして己を修め己を変える。このほかには道はないらしい。

歴史を学べば、思い知らされることがある。人間は、しばしば他人の領分を犯すものだ、という事実がそれである。人間の性質には、善性ばかりが恵まれているのではないのではないのか。一体、人間の本性は性善か、性悪か、どちらなのか。

- ① 『聖書』は、人間の原罪を説く——性悪説か。
- ② 『コーラン』は、人間の性質は脆弱なものと教える——性弱説か。
- ③ 『論語』は、「性相近く習い相遠し」と言う——中庸説か。
- ④ 釈迦は、人間の心の無明を説く——無記説というべきか。

大乘仏教の古典『法華経』は、

「仏種縁によりて起ころ。ゆえに一乗を説く」

という。人間皆、相互依存し合っている。一つ船に乗っているように、お互いの人格の向上は、運命共同体として共同歩調をとり、助け合いによるほかない、というわけであろうか。

こう考えると多少なりとも、希望が湧く。

そのとき、忘れてならないことがある。われわれ人類は、「空想」のうちにはなく「現実」の中に生きるのだということである。そして、お互い己を変えらるることのうちには、他人に不正や侵略をさせぬようにすることも含まれる。自分の内面の心の持ち方のみでなく、まず自分が無防備であることを止めて、しっかりと

と正当防衛の準備をすることである。

「隣人を愛しなさい」

「敵を愛しなさい」

と言いつつ、

「人を見たら泥棒と思え」

ということすら堂々と著書に書く高名な作家もいらつしやる。世界各地を旅した経験からして、私も、これは納得がいく気配りだと思う。「相手憎し」でそうするのではない。相手に泥棒をさせない、罪を犯させない、という「愛の心」からそうするのである。それが自衛の意味なのである。

他国の良心や信義を過信してはならぬ。祖国を守ることもできない不用心のままでは、公平な対話などできない。脅かされたり、戦争をして征服されるような弱さでは、対等な対話にはならない。

無防備な人が、己を守るように変わるとは義務である。まず、家にしっかりと鍵をかけて、泥棒に罪を重ねさせないことである。

こう考えると、自衛が隣人愛の発露の第一歩といえるのではないか。危険な夜道は歩かないことだ。ひつたくりの多い国では、自分の持ち物に用心せよ。それは、自己義務である。

自分の身は自分で衛ることが、愛の大前提である。そのことを、歴史は物語っている。

「友のために己のいのちを捧げるのが真の友である」といわれるが、そのためには自分がムダな死に方でいのちを失ってはならぬし、他に奪わせてもならぬ。普段、自分のいのちを守っていなければ、いざというとき友に捧げることはできない。これは自己責任であり、自己義務ではないか。

自分が生きていて、力を保持していなければ、他人など助けられぬ。銀行でも、「自己資本力」の足りないものは、他の企業を支援できないではないか。

歴史の教えるところに沿って見ると、家庭でも、世の中でも、自分ではなく、相手を変えようとするとなかなかうまく行かない。自分が変わればうまく行く。うまく行っている家族は「悪人」同士の家族なのだともいう。つまり、「自分が悪うございます」という自己反省と譲り合える心を持った人々の集まりだという。

隣人に対しても、相手を変えようとするより、自分の心を変えて——相性の幅を広げて——付き合うようにするほうが、ずっとうまく行くようである。

しかし、これは「アホウ」道徳ではない。自分を変えることの根本は、人助けの責任を引き受けることができるように、まず自分の「いのちの力」と自衛力を強めることにある。だからこれは、無防備、無原則の立場ではないのである。

明治の先達は、国家のリーダーとして、このことを十二分にわきまえていた。

「彼を知り、己を知り、変に応じれば、百戦これおのずから危うからず」(孫子)

「東洋の道徳、西洋の芸術」(佐久間象山、芸術とは技術のこと)

というわけで、まず西洋列強の科学技術を、次いでそれを使いこなす人間のための道徳・思想・宗教を急いで研究し習得した。

ただし、ヒューマニズムつまり自由主義・個人主義・民主主義は——用心深く——導入したものの、キリスト教については「大砲と聖書」、つまり聖書は心の攻略の武器に使い、大砲は国土を侵略する手段としたということもあって、警戒した。キリスト教の方は注意深く警戒して、積極的に輸入することはしなかった。つまり、明治人たちは、『バイブル』と「十字架」の後に大砲が続いている、と読んだのであった。

他方、西洋の芸術つまり技術は大いに学んで輸入し、それによって自己を作り変えようとした。元来、日本は「カラクリ」(細工、工作)が好きな民族である。和魂洋才の戦略が取られた。向かうべき目的は富国強兵であり、かつ殖産興業であった。当時の現実からして、それ以外に道はなかった。明治の指導者は十二分に賢かった。

貧国弱兵は、論外である。

富国弱兵なら、負けて植民地にされる。

貧国強兵は、あり得ない。

富国強兵が、これ唯一の道なり。

イギリスによるアヘン戦争（一八四〇～四二）、ひんびんと隙を窺うロシアの北方進出、ペリーの黒船の来航（一八五三）を伝え知って、全国どこに住んでいても、幕末・明治の先人たちは戦々競々であっただろう。必死で国防戦略を立てた。いかにすれば、欧米の帝国主義に侵略されないうで済むか、と。

だから、青年兵法家、吉田松陰寅次郎を動かしたのは、主に国防（海防）の問題なのであった。

日本民族の好む共同幻想の一つに、一国安眠主義とか一国平和主義というものがある。

しかし、そのようにして安眠を貪る国は滅ぶ。国内を統一し、強化し、国防に備えてこそ、独立を保つことが出来る。昔、お隣の清国が大英帝国に踏みこじられているのを眺めて、明治維新前後の日本人はそう判断した。それは、歴史の教訓であり、正しい読みであった。

もちろん、反対に、「武の共同幻想」というものもある。

われわれは、

「武を軽んずる者は武に滅ぶ」

「武に興る者は武に滅ぶ」

という歴史の両面の教訓を忘れてはならないだろう。

ただし、一国安眠主義は、何も武だけの問題ではない。経済でも、政治でも、文化でも、科学技術でも、哲学や思想でも、同様である。一国主義にこだわってみても、他国との交流なしには国民といういのち集団は生存できぬ。過度の「小国寡民」主義や一国自給の共同幻想に囚われ、しかるべき努力を怠るならば、国民は衰微していくであろう。

今日、日本は、そして各国も同様であるが、一国自給主義（アウトルキー）では生きて行くことができない。グローバル化の大潮流に船出し棹さすほかない。鎖国主義では高い生活水準を楽しむ大人口を養うことはできない。

日本列島という国土の上では、食糧自給の可能な人口は、現在の科学技術をもってしても、せいぜい多く見積もっても四千万人どまりであろう。江戸時代の人口は、それよりかなり少なかった。

自己は、他已在るによつてはじめて在る。いのちはつながりの中でしか生きられない。そのとき、問題はグローバル化とナショナリズムとのかかわり方である。

先にも触れたように、明治維新後の日本は「東洋の道徳、西洋の芸（技術）術」をモットーとして歩んだ。道徳とは宗教、思想、倫理道徳の全体であり、芸術とは美術ではなく、今日の科学技術の全体である。まず、組み合わせは次のように四つあった。

- ① 東洋の道徳、東洋の技術——清国と朝鮮が留まった道
- ② 東洋の道徳、西洋の技術——日本がとった選択、つまり富国強兵
- ③ 西洋の道徳、東洋の技術——東アジアの国としては不可能
- ④ 西洋の道徳、西洋の技術——大英帝国やフランス、アメリカ合衆国の道

もちろん日本は、王政復古おうせいふこという方式で、②の道を選択した。

天皇・皇室を權威けんいと価値の中心とし、神道しんどうを主柱しゅちゆうとし、その上に従来からの儒教じゆきやう（人間関係）および仏教（生死観）をもって国民道徳を組み立て、キリスト教は警戒し敬遠けいえんした——イスラム教はほとんど知らなかった——が、西洋からはヒューマニズムもかなりの程度導入した。

これは、当時としては幸運な組み合わせであったといえよう。しかし、現在から未来にかけては、それだけでは済まされなくなっているといえよう。この点は、後に考えてみたい。

その後の大東亜戦争の歴史が示すように、「敵を知り己を知る」「西洋の芸術（技術）を知る」だけでは十分ではなくなった。さらに、「敵には己を知らせない、不用意ふよういに知られない」というのでなければ、「百戦、危うし」となる。

日露戦争での日本海海戦が実証じつしょうした通り、日本海軍は優秀ゆうしゆうであった。同盟国イギリスからの支援も加わって、日本は勝利した。

しかし、まことに残念であったが、逆に大東亜戦争では、特に海戦では、相次ぎ惨敗を喫した。レーダーを軽視し、日本海軍はトン・ツー電信と望遠鏡だけという「時代並」の通信技術に留まっていたからである。これは進化の精神を欠く思想の欠陥であって、今日のわれわれの世代にとって、努々、忘れてはならぬ教訓であろう。

日本は、敵アメリカには早く己を知られ、敵を知ることが遅きに失した。

「孫子の兵法」をはじめ、軍学というものがある。しかし、科学技術の未発達な時代の軍学なるものは、抽象的な文章表現を読むと、知恵満載のように見えても、用い方によれば無用の長物、危険な遺物にさえなるのではないか。リスクの掟え方に短があるからである。

心意気は壮大でなければならぬが、壮大であればあるだけ、採用する思想・戦略・技術がそれに見合わねばならない。

「かくすれば、かくなるものとは知りながら、やむにやまれぬ大和魂」

という松陰先生の有名な言葉がある。個人責任の範囲での人生ならこれでよいけれども、国民全体という集団では、無暴に、この心意気によって行動し、失敗してはならぬ。「知りながら、やむにやまれぬ」では危険になる国民が「可哀想ではないか」。

「一将巧なつて万骨枯る」

という事態は、将と兵と人間として一体であればこそ、どうしても避けたい。枯れる万骨、哀れ。

(二) 無知に因る「欧米モノサシ」史観を修正する

松陰先生といえども、時代の子であった。しかも、いわば未完成交響曲であった。時代の制約を免れない人物であった。なぜか。どういう点でか。

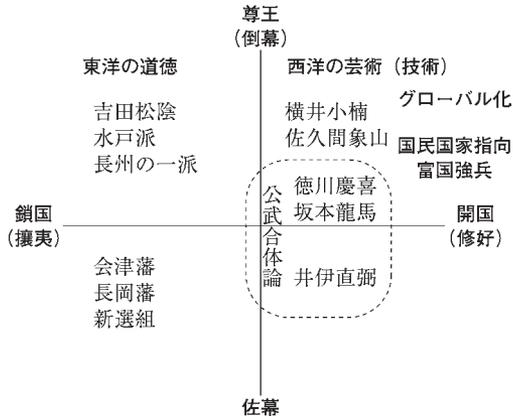
松陰先生は、欧米の帝国主義諸国がアジアの地域を植民地にして行く時代に、日本をいかにして守るかという時代の課題、すなわち「時務」というものを強烈に意識して字問し、また行動された。

だから、迫りくる敵を意識して、野蛮な欧米——夷、紅毛人といわれたのはアメリカ、イギリス、オランダ、南蛮といわれたのはスペイン、ポルトガル——を排撃するという意味の「攘夷」の方針を強く打ち出したのであった。「攘夷」とは、植民地化の拒絶であり、これは十九世紀前半のあの時代としては当然の結論であったといえる。

ここで、明治維新の前後の国論については、中でも攘夷の論をどう見るかが肝腎である。先人の研究書を紹介しよう（難波田春夫『國家と經濟』昭和十六年・一九四一年、第四卷、八一〜八三ページ参照）。

まず、当時のリーダーの一人、西郷隆盛の言葉というものが引かれる。西郷曰く、

明治維新の哲学



(注) 江戸時代末期に、日本人は二つの課題を持っていた。外に対しては、欧米帝国主義の侵略を防止することつまり国防であって、はじめは攘夷論が台頭した。そのために各藩を一つにして国防に当たる中央集権の体制づくりが求められた。

他方、国内においては、藩に分れて生活しては、もはや人々が生活水準を高めることが出来ず、藩の壁を取り払って全国を統一し、自由な活動が出来るようにすることが必要であった。ここから幕府に代えて朝廷を中心とする公共精神を培い、中央集権型の法治国家体制をつくることが求められた。自分の君主のみに忠誠をつくす「武士道」からそれを越えた「皇道」(大和心)への価値変換が行われた。

さらに、海外から西洋の芸術(技術)を入れるためにも、鎖国から開国へと門戸を開くことが求められた。結局、廃藩と尊王開国が望ましい戦略となった。

アリヤ手段と云ふモンヂヤ。尊王攘夷と云ふのはネ、唯幕府を仆す口實よ、攘夷々と云ふて、他の者を鼓舞する斗リヂヤ（薩摩藩士・有馬藤太への、西郷からの答え、ルビ、句読点追加）。

これは、攘夷論が維新の初めからあったかのように考える根拠として、持ち出される言葉だったというが、しかし、西郷の言うのは正しいか、「攘夷が初めから単なる手段にされていたのか」、疑問である、と難波田先生は述べている。

攘夷論を巡っては、馬関が砲撃されて長州が大失敗し、攘夷の不可能なる事を思い知らされたという事実があった。人々は、手段でない感情的な攘夷論から、冷静で一時的な手段としての攘夷論へと、方針を転換せざるをえなかった。こうして、開国を通じての国防という路線の採用となったのである。

次に、大隈重信の言が引かれる。大隈は、この間の事情を次のように、巧みに説明している。

鎖國ハ絶對ニ出來ナイ、攘夷ナドハ行ハルベキモノデナイト云フ事ガ薩摩ニモ長州ニモ分ツテ居ル、殊ニ外國ノ事情モ段々了解サレテ來ルト、開國ハ止ムヲ得又、勢ヒ幕府ヲ苦ムル爲メニハ難題ヲ以テカカルヨリ仕方ガナイト云フノデ、無理ナ仕方ヲヤツタモノデ……

攘夷ノ不可能ナルコトハ如何ナル亂暴人デモヨク分ル、出來ナイ相談デアルカラ先ツ外國ノ長ヲ取ル迄忍ンデ和スル、サウシテ國力ヲ充實サセテ其上テ外國ヲ膺懲シヤウ……

實^{ジツ}ノトコロ盲目的ノ排外思想ガ強^{チカラ}イ力^{ユウ}ヲ有^{ユウ}シテ居ルカラ、之ヲ緩和スル爲メニ其口實^{コウジツ}トシテ、先^マツ和シテ置イテ、國力ヲ充實サセテカラ攘夷ヲヤル、(下略)

明治十年に西南^{せいなん}の役で西郷^{えいき}が敗れた。その僅^{わず}か二年後に大久保利通^{おおくぼとしみち}が同郷の薩摩人の手で暗殺された。大久保は誕生間もない乳飲^{ちの}み子^ごであった明治政府の微妙^{びみょう}な舵^{かじ}取り^とを見事^{みごと}に果たした。大久保は、激昂^{げききやう}する征韓^{せいかん}論^{ろん}を抑^{おさ}え、冷静に国家戦略を立てた人物だが、「征韓論に関する意見書」(明治六年)をもつて、以下のように当時の征韓実行に反対した。

日本は、維新後日浅く、政府の基礎^{きそ}は定^{さだ}まっていけないのに、朝鮮^{ちえん}の役^{えき}をおこすなどは、国内^{こく内}の騒乱^{そうらん}を招^{まね}きかねない。

政府の財政は赤字であり、しかもその費用のうち外国からの借り入れによって賄^{まかな}う始末^{しまつ}だから、莫大^{まくだい}な費用^{ゆうぎん}を伴^{ともな}う外征^{がいせい}などは不可^{ふか}である。それゆえ、急ぎ輸出産業^{しゅつしゆさんぎん}を興^{おこ}して外貨^{がいふ}を稼^{かせ}ぎ、英露^{えいろう}を始め外国からの借入れを返済して、外国からの日本に対する信用を確保^{かくほ}すべし。

外国としては、露(ロシア)と英国が強力であり、まずそれに対抗できる国力^{こくりき}を蓄^{たくわ}える事が先決である。「早く国内の産業を興し輸出を増加し富強の道」を進めることである。今は征伐^{せいばつ}韓^{かん}の兵^{へい}をおこすことはできない(日本史籍協会叢書『大久保利通文書』第五卷、五三ページ以下。難波田春夫『國家と經濟』第四卷、八二ページ)。

維新政府にとつては国防が最大必須の切迫課題である。そこで、武器を生産するための近代産業を構築しなければならず、西洋から貿易により必要物を輸入しなければならぬが、それには外貨を稼ぐ輸出産業を強化するほかない。こうして、富国強兵と殖産興業とはどちらも後回しにできない車の両輪であった。

大久保なくして、もしも西郷隆盛や板垣退助ばりの感情的で、血気盛んな征韓論が政府内で支配していたならば、日本は「累卵の危うき」に等しかったであろう。国家は、対外政策において、決して背伸びをしてはならないのである。歴史には、カメヤカタツムリの自重も必要な時があるのである。

ただし、大久保利通も、征韓すること自体が善いことか否かについては、この文書では何も語らない。今は自分たち日本の国家が脆弱であるから外国へ兵を出すというようなことをすべきでない、自分たち日本が危なくなる、というだけであった。

どうも、大久保は朝鮮を征伐するというようなことは、そもそも道義的に悪であるから、日本の国力がついた後の将来も行わない方がよい、というのではなかったらしいが、日本が「西洋資本主義各国と同列に帝國主義を実行するかどうか」の善悪を問う、という問題意識は見当たらない。当時はそういう問いを発すること自体、政府指導者の意識の外にあってたろう。

今、東アジアでは、国際関係の構図は当時からあまり変化してはいない。日本に対し、中国、ロシア、朝鮮という三国と、それにアメリカ、西欧という諸関係をいかに構築するかという問題がそれである。

これを考えるとき、明治国家の建設において重責を担っていた人々の思いは率直でよく分かる。国防と海外交易のバランスとが、今日では想像もできないほどに、重視されていたわけである。新生日本国家の死活的生命線であった。大幅な国際収支の黒字を溜め込んだ現代日本からすれば、遠い国の事である——とはいえ、潜在的な飢餓の可能性を忘れてはなるまい。戦争で石油が止まったら息の根が断たれる。油断大敵。

だから、安全保障問題は、今も、これからも、重要さは減少しないだろう。この認識は、軍国主義のものではない。むしろ平和主義のものである。食うことと、身を守ることは、未来永劫に無くならない宿命なのであろう。

しかし、である。維新当時の攘夷論に疑問を呈する人もある。なぜだろうか。

そういう方々は、松陰先生の思想は、対外侵略への危険な性質を秘めていた、と批判なさる。日本は「神国」であるという神国日本絶対主義と帝国主義的傾向とが結びついて、後に八紘一字といわれたような思想を持つに到ったのだと批判される。

松陰先生は、東アジア大陸と南方への進出論を狂的に主張した、と批判されるのである。この松陰先生の論については、下程勇吉『吉田松陰の人間学的研究』（廣池学園出版部）「万国勦撫論」、三三四ページ以下の批判を参照。

実は、ここには、私も含めた大東亜戦争に負けた「敗戦世代」の抱える心的外傷後症候群の存在を感じ

る。この種の批判には、注意すべき錯誤が隠されているのではないか。つまり、いわゆる一國平和主義という絶対の理想論に立って、歴史の「後から」、このように文句をつけるのはたやすい、ということではないか。

人は「時代の流れ」という大勢の中に生きる者であり、大勢に逆らう者は滅ぶ。

もしも、日本が無防備平和論に浸って軟弱となり、ロシア艦隊に負けていたならば、賠償として東北や北海道くらいはむしり取られていたであろう。他の欧米列強とともに、アジア侵略に狙いをつけて着々と行動していたのが、当時のロシアだったからである。十七、八世紀よりこの方、帝国主義によって獲得した広大な領土を最も失っていないのはロシア国家なのである。

何しろ、ウラル山脈以西に住んでいたロシア人が、西はバルト海から、東はベーリング海までの広大なシベリアを全部領有し支配すること自体、地球社会としては、そもそもバランスを欠くのではないか。シベリアには、強大な帝国主義の侵略が行われつつあったのである。既に一七〇七年、ロシアはカムチャツカを占領している。

今でもロシア人の国家は、日本の北方領土のように、不法に占領した他国の小さな島でさえ、なんだかんだといって、返そうともしないではないか。世の歴史学者の一部の人々が、こういう他国の圧倒的な侵略の事実を無視して、明治以後の日本の動きだけを「軍国主義」「侵略主義」だと決めつける。それは、世界史

の進運しんうんに対する無知むちであり偏見へんけんである、といわねばならない。

十五、六世紀以来の北米や南米大陸において、最近ではオセアニアにおいて、土着原住民どちやくしゅうじんに対して、欧州白人の行った侵略について反省が起こっている。

吉田松陰先生のことに戻ろう。こうした状況下の当時、欧米帝国主義あらしの嵐の中で、海外を見たこともない一人の軍学研究者が吉田青年なのであった。帝国主義を行っていた欧米という夷狄いよき——野蛮人やばんじん——を撃ち払い、「聖人の理想に基づく統治を広げる」という、意図は純粋じゆんすいだが幾分幼稚いくぶんちゆうちなものだった。ペリーの船に乗せてもらい、海を越えて海外を見たい、という志こころざし（アンビション）を、彼は抱いたのだった。

ほとんど中国の古典しか学んでいなかった吉田青年は、当然古代中国の「八紘一字」という考えも学んでいて、他意なくそういう言葉を用いただけであった。それを批判しても無理というもの。

そもそも、八紘といひ一字というのも、どんな意味内容を込めるものか。いろいろな立場はあるが、これは古代中国大陸（東アジア大陸）の先人の使った言葉であり、「広い範囲の人々が一つの空の下に平和裡りにまとまって暮らす」というような意味であつたらしい。

ここには、われわれの思考における注目すべき反省点がある。「海を渡る」「海外からくる」という行動は侵略としてすぐに批判されるが、「陸続き」での進出行動は侵略として批判されにくいということだ。

歴史上、東アジア大陸の歴代皇帝たちが他国に攻め入るといふ行動は、『三國志』に現れているように、

「中原鹿を追う」などといって引つ切りなしに行われたことであるが、今日、誰もそれを侵略行動とは見ていないようだ。が、それはおかしい。そうした点は、後に述べるように、「帝国主義」の見方の変更を求めるのである。

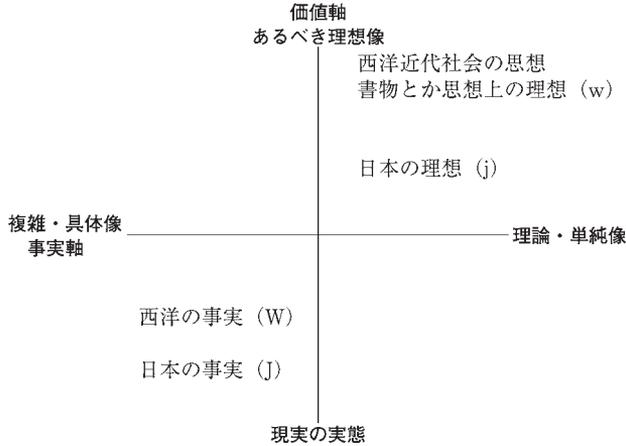
吉田青年が懸命に学んだこうした東アジア大陸の古典文書には、たしかに古代以来の武力による領土の拡張としての帝国主義の記録が満載されている。あの高名な諸葛孔明（一八一―二三四）でさえ、魏呉蜀の三つ巴の中で、蜀の国の帝国主義行動のために、懸命に知恵をしばったのだが、そういう意味での一人の優秀なる軍師に過ぎなかったのではないか。

帝国主義というのは、レーニンが「資本主義の最高かつ最後の段階」と述べたような種類の近代資本主義と併行する「帝国主義」ばかりではないのである。古代から、大国を築いた民族にはつきものの行動なのであった。

アメリカも、「神に認められる」と自分たちが考える限り、「自由」の旗を振りかざし、あらゆる手段を駆使して、「自らの建国の理想」を全世界に広げることが国是とする。それも一つの「帝国国家」の作法なのだ、ということをお忘れてはならない。アメリカが「理念の帝国」だといわれるゆえんである。

われわれは、欧米列強の当時の思想を調べて、彼らがどういう意図で外地に進出していたかを知らねばならない。近代日本の行動もその世界史の大勢の中に位置づけて判断すべきであろう。

社会比較の座標軸



(注) 異なる社会や文化を比較するとき、われわれは一方に純粋な「理想像」を置き、他方に複雑な「現実」を置き、両者を比較して、その現実が理想像からどれだけはなれているかを「測定」して、比較し批判したつもりになる。西洋近代社会と比べて日本の近代社会は封建的だとか、正常な発展コースを辿らないという批判を下す。このとき、その人は往々にして西洋の人の書いた「書物上の理論とか思想の中の理想像」を基準に、日本の現実がそれからどれだけ離れているかを述べているだけである。それも1つの比較ではなるが、ある種の理想像と現実との比較である。西洋と日本との比較ならば、西洋の現実と日本の現実とも比較すべきである。西洋型の近代社会と自負するアメリカにこそ、日本でいえば、明治維新近くまで、黒人奴隷差別が存在したではないか。また、西洋でも日本でも、近代社会なるものは矛盾を孕み、汚れた要素を含む社会であり、乗り越えられるべき社会であることにはかわりはない。西洋の書物上の理想を物差とする比較論は、方法上、誤りなのである。いい加減、日本の知識人に多いこうした「比較の誤り」を乗り越えるべきである。理想像を追うのはよいが、理想像にも西洋型だけではなく各種のものが有る。

欧米だけが「民衆の力による下からの自然発生的で理想的な近代化」を成し遂げ、他の国、特にアジア辺境きまぎの日本の近代化などは歪ゆがんだ近代化であって、上から強権きやうけん的に行われた近代化であったからよくない、などという事実を反する平和ほげ的な歴史論は、現場を知らない書齋しよさい学者の説であり、もはや通用すまい。そもそも比較の方法論が誤りだ。

欧米でも、そのような下からの平和的な近代化など全然、事実ではなかった。

欧米列強は、同時進行的に植民地を作りながら、国内の経済発展、つまり資本主義形成を行ったのである、そのことをまさにレーニンが『帝国主義論』(一九一六)の中で強調しているのではないのか。世界史の「事実を見よ」と言いたい。歴史の学習は何より事実を見ることから始まる。もちろん、理想論も思想の一つであり、思想も事実の一つ、心実しんじつではある。しかしそれは、心の事実としての心実であり、素実そじつでも真実まじつでもない。取り違えてはならない。

もちろん私は、こう述べたからといって、これからの世界でも、旧来きゆうらいの愚かな帝国主義を繰り返せ、と言うのでは決してない。武力により領土を拡張せよ、などと言うのでは毛頭もうとうない。これからは、平和的な方法で地球上の恵みを活用する道を、各国とも皆で考案こうあんしなければならぬ。

ともかく、松陰先生は、作曲家シューベルト流にいうと、未完成交響曲であったのだ。

いくら天才とはいえ、三十歳弱で人生を終わつたので、もし七十、八十歳までご存命であつたならば、と惜しまれる。

幕府の刑吏によつて、明治維新の明ける数年前に、小塚原にて首を刎ねられるという非運に出会つた。そのお陰で、時代が攘夷から開国に向かうという大回天の様を、松陰先生はご自分の肉眼で見届けることができなかつた。それゆえ、当時までの攘夷思想を捨てることを書き遺すことができなかつた。悲しいことであつた。人は少しでも長命でありたい。

「君子豹変す」という。もしも、松陰先生が維新を超えて生き永らえておられたならば、おそらくいち早く攘夷論から開国論へと、移られたであろうに、と推察される。君子は、時代遅れの自説に固執せず、たえず、時の流れの中に真理を現していく。

自然科学ではそれほどでもないが、人間の問題についての学問や思想であれば、どんな天才でも、いや天才であればあるほど、人は強く時代の子なのである。

天才は、時代の最高最深の問題に取り組むものであり、その部分では時代に制約される。自然科学でも、幾分そういう傾向がある。空中からチツソ（N）を取り出して肥料をつくる方法を開発したのは、資源の制約という時代状況を乗り越えようとした一九二〇、三〇年代のドイツ科学（化学）の成果だつた。

人類の国家社会は時とともに動いて行くから、それについての人の解答は、彼が生きた時代の制約を帯び

ることになる。時代の制約を帯びながらも、その中に永遠の真理につながる一筋の道貫徹するならば、個人も歴史に生きる、ということになるのではないか。そういう人物が「千載青史に名を遺す」のである。

(三) 帝国主義をいかに乗り踰えるか

どうも、日本の歴史認識にとっては、二十一世紀の頭に立って、このあたりで、世界史の地平から、侵略・拡張の理解の仕方を再検討する必要があるのではないか。すなわち、海の中に浮かぶ島国根性的な見方を踰えて、地球全体を見渡すものへと弘げるのである。

それは、まず次のような通念を改めることである。つまり、欧米先進国には帝国主義なしの理想的、平和的な資本主義の発達があり、後発国、日本資本主義ではそうではなかった、という通念である。この自虐的で、世界史の事実に対する誤った思い込みを捨てるべきなのである。

私自身、一九六〇年からの学生時代には、欧米の資本主義の発展は自然であり、自生的であり、平和的であり、理想的であるが、他方「日本の資本主義の発達は歪んでいた」、国家権力が富国強兵のために上から強制したものであった、という趣旨の資本主義発達論、西洋経済史論に取りつかれていた。

そういうものしか大学の講義で学ばなかった世代の一人である。幼稚な頭であったから、現実もその通りだったと思ひ込んで来た。

この分野で戦後日本の世論をリードして来た思想、その最高峰たるものは東大のそれであった。東大の大塚久雄教授の西洋経済史論は、当時としては、その種の優れた学説の筆頭であった。

だが、それは現実ではなく、**理想型**——現実のものでなく理論上の構築物——であった。しかし、やゝもすると、この理想型を**理想型**——最も望ましい善なるもの——とするから、現実と置き換え、現実だと思ひ込ませる。これが、優れた心理的効果を、若い学徒に与えたのである。

発展の理想的標準は、すべからく欧米近代なるものに、しかしその「非現実」に、求められたのである（『大塚久雄著作集』岩波書店）。これを私は、**欧米モノサシ主義**と名付けた。

その威力は、同じく東大における丸山眞男教授の「日本政治思想史」の政治学の放つ威力と同様であった。丸山先生の『日本の思想』（岩波新書）は、この点、手頃で必見の書である。今でも、大学には、そういう歴史論を保持する人々が沢山いらっしやる。

荒々しい資本主義を發展させ、帝国主義と植民地支配を先に行った張本人は欧米である。

ここには、先に予告したように、世界史を理解するときの、逃せない重要な注意事項があることを申しあげたい。それは、「帝国主義」というものを、地理的にどう考えるかということである。

このことをよくよく理解しておかないと、特に十九、二十世紀の日本の対外行動だけに対し、無理な批判を加えることになるからである。

それは、以下の点に関する理解の仕方である。

①陸続きの大陸における帝国主義を見逃さない
世界史上、大国といわれるものは、すべて異なる民族を征服し統合して出来上がったものであり、大々的に侵略と帝国主義を行った成果である。

一、隣の東アジア大陸上の帝国——歴代の帝王たちによる領土支配（秦、漢、隋、唐、宋、元、明、清など）。

二、ロシア帝国・ソ連帝国——近世では、ロシアによる東ヨーロッパ支配とシベリア征服とアジア大陸周辺への侵略。

三、イスラム帝国——インド亜大陸上やアラブ・地中海地域で興亡した。

四、アメリカ合衆国——小さな十三州から出発し、開拓と称して西部へと領土を拡張した（アリュエシャン、ハワイやグアムまで取り込んだ）。

これらは悉く、陸続きの舞台上での一大侵略行為であり、すべて正真正銘の帝国主義なのである。

古くは、ローマ帝国のカエサル（前一〇二〜前四四）『ガリア戦記』（岩波文庫版あり）を読めばよい。これは、トップのカエサル將軍自身による微細にわたる戦記であるが、「陸続き」のヨーロッパ大陸における領土拡張の記録であり、古代帝国主義の記録にほかならないのである。

もちろん、日本国の正史『日本書紀』の記録も、決して平和極まりない大和國家の成立といったものでは

なく、一面で大和政権による出雲、九州、東北への領土拡張の記録なのである。

神武天皇の東征も、ヤマトタケルの尊の活躍も、猫の額のような小さい土地ながら、やはりこの日本列島上における帝国主義的な支配拡張の物語にほかならない。坂上田村麻呂（七五八〜八一二）は、さしずめ大和朝廷国家のカエサルというところであろうか。

陸奥の蝦夷については、北上川流域の一大平野を根拠とし胆沢を中心に強大な軍事力を誇った大墓公（オオモノキミ）、阿弭流為（アテルイ）がいて、延暦二十（八〇二）年、坂上田村麻呂によりやつとのと征討された（『水沢市史』第一巻、七六ページを参照されたい）。九州から近畿に至る地域の歴史は、古すぎて記録が少なく、国家統合・国造りの筋道を知るには、東北の古代史が好適であると思われる。

なお、東北の各地方史における古代史の記述では、残念なことに考古学上の発掘資料と情報が「神の手」をもったF氏により汚染され偽造されているものが多く、今後大幅な修正が必要であろう。考古学が扱える情報は限られていて、文献と伝承の情報——それとても政治的文化的に歪められた心実の作用をこうける——が欠かせない。それだけに、考古学発掘の情報の汚染は、早急に正されねばならない。

東北の蝦夷の場合のみでなく、近畿地方以西の古代史でも、「神の手」は介入しなかったにせよ、政治的・文化的な「大和を高く、辺境を低く見做す」態度、あるいは学問上の偏見に染まったものはあり得るから、絶えざる修正が必要であろう。素実の扱いには、細心の注意が求められる。

民族の移動については、ここには面白い偏見が潜んでいる。すなわち、世界中で陸続きの舞台では、他民族の住むところまで領土を拡張した国家やその支配的民族の行為が、帝国主義支配、植民地支配だと思われる傾向がある。

だが、実質は他民族への支配であり、帝国主義行動なのである。近代、現代でも、旧ソ連や中国など、そういう行為を続けていると見られる国家が存在しているが、概して植民地支配であることを批判されないままである。

この意味で、人類の移住行動はすべからず帝国主義侵略という側面をまぬかれない。それがこれまでの人類の「いのち」の動き方の一面であったのだ。

これは、植民地拡張であり帝国主義行動であると容易に分かり、そのように見なされる。先に触れたスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカなどによって行われた、アラブ、中南米、アフリカ、アジア各地での海外植民地の支配がある。

アメリカ合衆国によるハワイ、アッツ島、フィリピン、グアムなど太平洋上の島嶼地域の征服、それに欧米列強に遅れたが日本による台湾、朝鮮半島支配などもある。

そして、東アジア大陸における、清朝・中華民国・共産中国の、周辺民族への侵略も忘れてはならぬ。

② 帝国主義を越える平和な道は何か

帝国主義とは、古代から現代まで、結局武力を用いての土地とその富の支配であり、その目的は土地の資源と実りを獲得し、そこに住む他民族を搾取することにある——他面、文明や文化の移植も行い、「文明化作用」などと称する。それは、地球上の資源と実りを武力と戦争によって手に入れる方法である。「資本主義の最高段階の行動」としてのみ、帝国主義を規定するレーニンのやり方は、世界史の全体を理解するものではない。

これからは、帝国主義でなく、武力によらない交易通商つまり市場システムによって、自分が持たないものを手に入れ、自分が造ったものを販売して、お互いに満足しながら豊かになろうという方法が望ましい。これを広い意味での互恵制 (reciprocity) といい、相利共生の方法である。WTOのような市場経済のルールが普及するが、それにはそれなりに正当な理由があるのである。

今後、人類が手に入れたい物は変化する。それに応じて、手に入れる方法も変化する。大地からの恵みはもちろんだが、情報というものが資源となる。情報とは、他所や他人にない「差異」を帯びた知識とか知恵というものであるが、その情報を通じ合う情報ネットワークが、これまでの武力や戦争に代わって働く。

さらに情報を生み出す人も、資源となる。まさしく中国がそれと示しているように、大人口が大資源となる。昔は大人口は消費ばかりするもので、発展の足を引っ張ると思われたが、今は資源となった。

技術も、人も、簡単に移動する。人とは情報である。そして、情報の容れ物が頭脳である。一切は頭脳の産物なり（養老孟司『唯脳論』青土社、参照）。

頭脳が、情報化時代の人そのものである。頭脳が動けば、人が移動することと同じである。「頭脳労働する人」の移動が、機械や製造工場の移動と同じになる。

さらに、頭脳や人が、移動するより、情報自体が電磁気に乗ってネットワーク上を移動する。

これからの人類の世界システム作りでは、これまでのような土地とそこに住む人を支配する帝国主義といった野蛮な方法（やばん）を乗り（の）躰（こ）えねばならない。古い帝国主義の思想も、乗り越えることができるであろう。

しかし、ややもすれば、領土争いという古い帝国主義に代（か）わって、情報の帝国主義が発展するかも知れない。——武器は特許、ノウハウ、そしてサイバーテロ、舞台はインターネット。

われわれは、情報によって他人を陥（おとし）れる行動を排除しながら、平和的で建設的な方法として、市場システムを改善し活用して行きたいものだ。

（四）マッカーサー改革への被害者意識から脱け出る

さて、現代、九・一一テロ以来、日本を含めて世界中に、正義はわれにあり、相手には身にも心にも悪魔（あくま）が住むぞ、という黒白（くびやく）歴史論が再び勢いを増している。これは困ったことである。しかも、誰がシロか、クロか、はつきりしない。その点、東西冷戦時代には、誰が味方で誰が敵かがはつきりしていた。マルクス

主義・社会主義・共産主義か、それに反対する陣営か、と。

今はその関係が崩れて、新たな敵捜し・悪魔捜しが始まっているのではないか。その時、「自分が苦しむのは、昔、誰々があのとき、自分に対してああしたからだ」といって、自分の苦しみの原因や犯人を、自分の中にはなく、他者の中に求める。特に、過去の歴史の中の他者に求める。そして、現在に生きるその子孫に謝罪を要求し続けることもある。

日本では、どうしても心が過去に向かう。特に最近では、復古論と反米意識とが再び台頭しているようだ。かつての占領政策とそれを進めた連合国の中心たるアメリカ合衆国への、特に連合国最高司令官ダグラス・マッカーサー（一八八〇～一九六四）への、反感の混ざった「ぼやき」が聞かれる。

悪者・悪魔捜しが、占領政策に目をつけはじめていたのである。すでにマッカーサー統治下でマッカーサー批判を行っていた勇氣ある少数の人々は別であるが、左派だけではなくかえってマッカーサーを賛美していた筈の保守派にも、反米感が多い。

自分たち日本人は、強圧的な占領の下で、有無を言わせず骨抜きにされ、心も弱体化させられたのだ、現代の日本民族の苦境と心の迷いは、まさしくそこに起因する、と。

日本自身の中には悪はない。外から来た、と。

この傾向は、甘えの反米感情とくつついた被害者意識（コンプレックス）の現れではないだろうか。中国

政府や韓国政府なら、文句を言えば、いちいち反論されるので用心すべきだ——入国ビザにも障る——が、アメリカは放任して取り合わぬものだから、ストレス解消法として、ぼやきを向けやすい。

今、われわれ日本人のあるグループは、右も左も、アメリカに向かって、「マッカーサーによる対日占領政策は日本への加害である」といって、マッカーサー占領政策がもたらした日本側への害毒を言い立て、占領政策を告発している。日本人には悪いところはなかった、アメリカの占領政策こそが、日本人の心を攪乱し弱体化したのである、と。

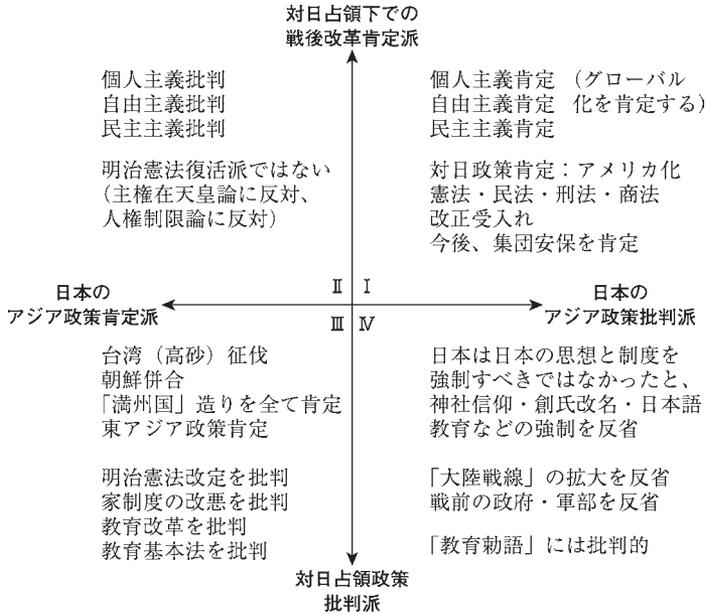
自己の被害者意識と相手非難。自己無責、他者有責。

この種の形での占領政策責任論は、一つのセットになっている。必ずしも同じ一人の人が、日本は悪くなかったという自己弁護と、GHQ・マッカーサーが悪かったという占領批判をセットにして主張をするのではないけれども、そうした人々は一つの楕円の二つの中心のように、同じグループに属する。図でいうと同じ座標軸上Ⅲ及びⅣの象限に乗っているのである。

このような態度は、「ねじれコンプレックス」と呼ぶことができるが、われわれはその心情をどのよう^{しんせつ}に解きほぐし、整頓すればよいか。

批判の対象にされるのは、「すべての占領政策」であるとも言えるが、そうでもなからう。良かったとき^{こく}れるものもある。不在・寄生地主をなくし自作農を創設した農地改革や、財閥解体、労働組合政策などは告

戦後改革と対外関係への態度



(注) 国内体制への態度と国際政策への態度との組み合わせには、いろいろな型があるが、問題は自己弁護と他者批判の組み合わせⅢである。「日本は他人に良いことをした、アメリカは日本に悪いことをしてくれた」とする独善の心が混じらぬようにすべきであろう。これは幼い子供の精神がかかりやすい傾向で、自分たちが苦しむのは「誰々がこうしたからである」と、それを根にもって文句を言う心でもある。しかし、われわれは、前向きに国内体制については、憲法はじめ、過去の歴史的伝統を十分に踏まえて、今後に向けての改革の方向を描く必要がある。

発せられない。批判点としては、特に以下のようなのが提起されているようだ。

① 天皇帝および「国体」観念の破壊

アメリカは、天皇を象徴として残すには残したが、元首かつ主権者——といっても統治権の総覧者——としての地位を奪い、国家体制を揺るがせ、主権在民の国家にしてしまった。

これは、連綿として続いてきた日本民族の「国体」(国柄)——國體——の歴史を中断させ、天皇・皇室を中心として纏まってきた国民精神を分裂させ、弱体化させる意図から行われたのである。

マッカーサー司令部は、憲法を一週間かそこらの短時日に急いで作文し押し付けた。それは、占領は相手の体制を変更しない、という趣旨の国際法に違反したものであった。ドイツ占領では、ドイツ人自らが憲法を改定したというのである。

この点と、根のところがかかわるが、マッカーサー元帥の試みのうち、最も重大な意味を有するのは、「日本のキリスト教化」の政策である。それについては、レイ・アーム編『天皇がバイブルを読んだ日』(講談社)第一章を参照するとよい。

マッカーサーと日本側のキリスト教徒の重要人物たちは、日本人に「宗教的回心」が必要だと考えた。その線に沿って、日本側の幾人かの著名な指導者たち——殆どがキリスト教徒——が動いたのである。キリスト教化は、お隣の「韓国」では美事に成功しつつある。

日本の戦後改革には、マルクス派とキリスト派という二大流派が大きく肩入れしたのである。

②個人主義、自由主義、民主主義の弊害

日本では、植えつけられた個人主義は、他人への迷惑を何とも思わない自分勝手流の利己主義（ミーイズム）へと変質した。自由主義は、何をやってもよいという自分勝手流の自由主義となった。民主主義は、自分たちの言いたいことだけを言い張る自分勝手流の口先ゴネ得主義となった。

その結果、

「みんなのために行動する」

「国家のために行動する」

「自分の国は自分で守る」

というような「公共心」が、日本国民の心から無くなった。日本の昔からの公共心は崩れ去った。公共心は、村の共同体と、街の共同体と、天皇への忠誠と結びついていたが、経済成長によって村が崩れ、街は他所者の寄り集まりへと変り、憲法改正によって天皇の地位が変化したので、公共心の土台がすべて失われた。

③国家意識の薄れ

さらに、国家意識までも失なわれつつある。占領政策による神道指令は、「神道は天皇イコール神（ゴッド）と考えている」というまったく偏向した解釈に立ち、国民から「天皇・皇室中心の民族精神」を抜き

去る効果を生んだ。

いわゆる「神道指令」は、政治・国家と宗教との分離を貫徹するといふ趣旨だけに止まらない。占領当局は、日本人は「日本の天皇は神の直系の子孫であり、現人神であるとの観念を受け継ぐ存在である」というイデオロギーに囚われている、との理解に立ってそれを否定する「天皇の人間宣言」を出させた。これにはクリスチャンが関与した。これは、当時の事情をよくご存じの方からお聞きした。その原文の核心を掲げよう。

読者はどのように感じられるか、どうかお試しあれ。

〈資料〉神道指令（抜粋）

「軍国主義的」乃至過激ナル国家主義的「イデオロギー」ナル語ハ、日本ノ支配ヲ以下ニ掲グル理由ノモトニ他国民乃至民族ニ及ボサントスル日本ノ使命ヲ擁護シ、或ハ正当化スル教ヘ、信仰理論ヲ包含スルモノデアアル

(一) 日本ノ天皇ハソノ家系、血統或ハ特殊ナル起源ノ故ニ他国ノ元首ニ優ルトスル主義

(二) 日本ノ国民ハソノ家系、血統或ハ特殊ナル起源ノ故ニ他国民ニ優ルトスル主義

(三) 日本ノ諸島ハ神ニ起源ヲ発スルガ故ニ或ハ特殊ナル起源ヲ有スルガ故ニ他国ニ優ルトスル主義

(四) ソノ他日本国民ヲ欺キ侵略戦争ヲ乗出サシメ或ハ他国民(ト)ノ論争ノ解決ノ手段トシテ武力ノ行

使ヲ謳歌セシメルニ至ラシメルガ如キ主義

（國學院大學日本文化研究所編『神道事典』弘文堂、一三七ページ、句読点、ルビ追加）

いわゆる神道指令は、字数からいえば、大半は政治と宗教を分離せよという点に関するものであるが、その分離の内容は世界標準からすると異常に厳格なものである。

この指令を側面から推進した——起草もした——日本側の「良識的な」人々の中心は、クリスチャンであったと聞く。「どさくさに紛れて」とは私は思わない。

だが、歴史の変革においては、一群の人々が陰ながら重要な役割を演じる、という事実の例証である。こうした事実は、大衆が政治を決めて行くというべき民主主義と、いかなる関係にあるのだろうか。

その結果、古典に語られたような国家・国民としての自覚を保ちつつ、「神の前で神聖な心となって、国事に参加し、人生を歩む」という態度が地を払った。私事にしか関心がないような個人主義に訴える新興宗教も繁盛してきた。

国民の精神からは「みんな日本人なのだ」という国民・国家意識がなくなり、孤立し分裂し合う私的精神だけとなった。

日本は、先にも触れたように、首相が「天皇中心の神の国」などと言おうものなら、マスコミが総攻撃するというようなアレルギー国家になり果てた。自分の言葉できちんと説明をし返すことのできぬ理論欠如、

言語欠如の首相も情けない首相だが……。

神の国は、なにも日本だけではないのである。グレート・ブリテン（大英帝国）も、アメリカも、まさに神の国なのである。あるいは、天の国、仏の国ともいえよう。

しかし、国家からは神聖さが失われた。若者が結婚式を挙げるとすれば、殆どが模擬のチャペルでというように、結婚式がファッション化した。日本ではキリスト教徒はついで全人口の1%を超えたことがなかったが、ファッションとして、次世代には急増するのではないか。

ゆえに、正確には、国家からは——日本では——「伝統的な神聖さ」が失われる、というべきか。

④家の觀念の解消と制度の改革

民法改正により、過去に向かって祖先を辿り子孫を続ける家系の意識が全く薄くなり、祖先を崇拜する心も消えてしまった。その結果、自分は代々続く家——祖靈の共同体——のメンバーであるという家共同体の意識がなくなり、家族に心の団結がなくなり、家族でなく「個族」といえるようになった。

家は、帰宅してもバラバラに生活をするだけの「ホテル」のようになった。スーパーやコンビニのおかげで、「個食」ができる。

もはや日本社会とは、今を楽しむことができさえすればそれでよい、と思う者同士が出会う場所にすぎない。国民の大半が住む都市がそうになった。そういう都会人を送り出した田舎は過疎で人が居なくなった。日

本の若者は、仏教も、儒教も、神道も、ほとんど知らないし読まない。郷土（ふるさと）は消え去る寸前。元来、アメリカではそういう「家なき人」の観念で国ができたように見える。しかし、国家と国旗・国歌への忠誠の教育が、その欠点を補い、キリスト教が魂の不安を補ってきた。思いのほかに家系意識も強い。

⑤結婚と相続と子孫繁栄の危機

民法改正により、結婚はカップル二人だけで決めればよくなった。それゆえ、「家」を続けるとか、親祖先の霊を受け継いで子孫に伝える、というような意識はほとんどなくなった。タテの時系列、歴史系列の家庭は、ヨコに一代毎に、ズタズタに輪切りにされた。

「御先祖様に申し訳ない」「御祖先様が見守っておられるから」などという考えが、家庭教育から消え去った。

それに輪をかけたのが相続制度と相続税制の改革である。

老親を看る者（長子とその家族）が主な財産を相続するという意識がなくなり、年老いた親は子供たちの間を渡り歩く。子があっても親を扶養せず、親は老人ホームに——自ら進んで——入ることになり、老人自身も子供たちとの同居を好まなくなりつつある。

おまけに、個人主義のもう一つの効果として、いのちが連綿として続く子孫繁栄という観念がなくなり、子供は若い親の「オモチャ」と化し、子供の数も極端に減少した。

その方が地球環境にとつては好ましいのだろうか。人口が爆発しなくなるからだ。日本はこの面で地球社会の最先進国になりつつあるのか。インドでも、親が大学卒になると、子供の数はたちどころに二、三人に減ってきている。

家共同体という意識の崩壊は、日本という国家の意識と、そういう家が集まっていた郷土（ふるさと）意識を無くす。いづれ盆と正月の帰省ラッシュは激減するのではないか。帰る家が田舎に無くなるのだから。連綿と続く家を連想するときのモデルは「万世一系の皇室」なのであり、それが近代日本人の国家意識——家族国家論——の土台であったが、そういうことの教育も哲学も敗れたのであろう。モデルは、にこやかで仲睦まじい皇室家族であるが、連綿と栄える皇室家系ではないだろう。

このノートで繰り返し言うように、マッカーサー改革と工業化・都市化とは、日本の伝統的な家・郷土・国家論を突き崩し、新論を求めているのかもしれない。皆さんはいかがお感じですか。

⑥ 国民同胞意識の解体

アメリカの後を追うグローバル市場化によって、会社（経営者・株主）主義と脱国家意識がはびこる。「会社は、儲かりさえすればどここの国にでも出掛け、国家の同僚国民の失業など知ったことではない」「資本は国境を超えろ」

という百五十年前のマルクスの予言は的中しつつある。実は、その会社でさえ、一生かけて働くところではなくなり、いつ解雇されリストラされるか分からないところになった。

「国民はお互い同胞である」という共同体精神が薄くなった。世界中の人々が、アメリカが輸出する資本主義の精神と仕組みに染まる。日本の企業家たちも、アリのようにそれに群がる。どこの国でも必ずそうなる。資本主義と市場主義は圧倒的だ。

折しも、日本の隣には国家意識の強烈な中国が台頭しつつある。東アジアのいのちのエコシステムの中で、中国は、ブラックホールのように他国の会社を獲って食う捕食者になるのか、他とともに栄える共生者になるのか。「漢民族」なるものが周辺民族を支配してきた二千年の歴史を、われわれは無視できない。

(五) 過去に心を奪われず、未来への建設に取り組む

このような占領政策批判と絡み合った日本社会の現状描写は、一部の表面の描写とてならば、なるほど当たっている。しかし、その原因を捜すとき、それを占領政策だけのせいにするのは、芸がないし、正確ではない。

五十年前、一九四五―五〇年頃の、占領政策というより、むしろその頃から発展した資本主義・産業化・市場経済の徹底した作用が、右のような日本社会の変容を生み出してきたのである。これは、財界を始め、日本人自身が必要なものとして希求してきた道ではないか。家庭を犠牲にしてまで長距離通勤や転勤、深夜勤務を推し進めたのは、ほかならぬ会社と国民自身であった。

なるほど、アメリカによる占領政策は、竹に木を接ぐようにして行われ、強制的であり、圧倒的であり、人為的であった。だが一体、日本の伝統社会と伝統文化は、そもそも、そんなに「すぐ壊されるほど脆弱なもの」であったのだろうか。

よく考えると、どうもそうではなさそうだ。むしろ「変わり身の良さと速さ」もまた日本人の従来の性格なのであり、日本文化の身上なのではないのか。

また、以上のように、いろいろ病理的な問題が出ているのなら、占領者の政策に不平を言うより、そんな暇があるなら問題を解決するために頭を使い、前向きに取り組むべきであろう。

「占領政策が、悪かった、悪かった」

と後向きに不平を繰り返すままでは、一步も前に進まず、無用な反米感情を煽り立てるだけではないのか。

アメリカによる占領は、そんなに悪ばかりであったのか。私はそうは見ない。占領政策は、いかなれば恩寵的試練であった。

昭和天皇もマッカーサーにお願いされたように、食うに困った日本国民に、進駐軍は手を差し伸べてくれたのではないのか（菊地久『天皇陛下とマッカーサー』山手書房）。昭和天皇とマッカーサーとの第一回会見の内容については、この章の末尾に引用したが、一九八〇年あたりの時代までは、日本の保守派の中でも、マッカーサーにはプラスの評価が多かった。今はしかし、逆転したように見える。